

## メンガー『原理』成立史研究とメンガー文庫 Formation of Menger's *Principles* and Menger Library

池田幸弘

IKEDA Yukihiko

私は、一昨年 Die Entstehungsgeschichte der Grundsätze Carl Mengers なる書物を Scripta Mercaturae 社から上梓した。これは、タイトルが示すとおり、近代経済学の基礎を作ったとされるワルラス、メンガー、ジェボンズの三人組のなかのメンガーについて、その主著である『国民経済学原理』の成立を問うたものである。私がメンガーについての研究を始めたのは、十五年以上も前のことだが、当時、メンガーにかんする伝記的情報については、隔靴搔痒の感があった。伝記的情報が乏しいだけでなく、どのような資料がどこにあるかがわからないのである。そうした資料的制約のなかで、本学の社会科学古典資料センターが誇るメンガー文庫は、ほとんど唯一の資料の源であった。私がここを最初に訪れたのは、学部卒業の前後だったと思う。私は、卒業論文でも、メンガー『原理』の成立の問題を、エミール・カウダーが編集したメンガーのラウ『国民経済学原理』への書き込みを対象にして、論じてみた。その後、もったなくなかがみつかるのではないか、という期待をもってここを訪れたのではなかったかと思う。考えてみれば、当時すでに精力的にオーストリア学派研究を進めていらっしやう八木紀一郎先生にはじめてお目にかかったのも、センターにおいてであった。また、当時センターの教授であった杉山忠平先生と言葉少なにしかし暖かな会話をかわしたのもここにおいてであった。拙著はこうした方々のご好意に少しでも報いることができれば、という願いをこめて書かれた。

かつて、小林昇先生がメンガー文庫の諸文献を使いながら、御自身の重商主義研究をまとめられたことはよく知られている<sup>1)</sup>。この事例が示しているように、メンガー文庫は古典研究全般にとってきわめて有力な源である。さて、それでは論点を限定して、メンガー研究者にとっては、メンガー文庫は何なのか。一言でいえば、メンガー研究者にとっても、メンガー文庫は資料の宝庫なのである。メンガー文庫は、メンガーの蔵書であるから、ここから彼の学問的な関心を知ることができる。ただし、メンガーはやや fanatic な蔵書マニアであったから、多くの蔵書マニアと同じように集めることそれ自体が自己目的化していたといえないこともない。しかし、経済学やその周辺については、やはり彼の学問的な関心のある程度反映した蔵書になっているといえそうである。また、メンガーはしばしば、蔵書に詳細な書き込みを施している。great economist として名を残した人々のなかには、蔵書の存在は知られてはいるが、読んだ形跡をほとんど残していないアダム・スミスのような人もいる<sup>2)</sup>。こうした例に比べれば、メンガー文庫の事例は、研究者にとっては、もっけの幸いであった。メンガーが書き込みを加えた書物は多数に及ぶが、そのなかでも量的にも質的にも重要なものが、上記のラウ『原理』への書き込み、自著『原理』への書き込み、ロッシャー『国民経済学の基礎』への書き込み、ミル『経済学原理』独訳本への書き込みである。ラウ『原理』への書き込み、自著『原理』への書き込みにかんしては、カウダーが来日したさいに、これをトランスクリाइブし、メンガー研究者への何よりの置き土産とした<sup>3)</sup>。ロッシャー『国民経済学の基礎』への書き込み、ミル『経済学原理』独訳本への書き込みも大量であり、カウダーの方式でトランスクリाइブすることが強

く望まれる。筆者は、上記の拙著でもこうした書き込みのたぐいを利用しているが、まだ、トランスクリプションの段階には、いたっておらず、研究をはじめてから相当の月日が経過したことを考えると、日暮れて道遠しの感がある。この種の作業には、なによりも根気と熱意が必要であり、可能ならば、複数の研究者、ライブラリアン、そしてネイティブ・スピーカーの補助を得て、行われることも考えられよう。

長い間メンガー研究者はメンガー文庫の有用性について気づいていながら、それをうまく生かせない状態が続いていた。こうした局面を一挙に打破したのが、メンガーの孫、イヴ・メンガーのメンガー関係資料のデューク大学への寄贈である。これは、メンガーの子息で数学者でもあったK.メンガーの死去に伴うもので、もはや資料の四散は避けたいというメンガー一家の望みがこうした形で研究者に大きな利便をもたらすことになった。子息K.メンガーがどうも父メンガーの伝記を書いているらしいことは、日本の研究者にもよく知られていたし、実際にPhilosophia Verlagから公刊されることも定まっていたようである。私も、K.メンガー氏に個人的に書簡を出し、伝記の進行具合をうかがったこともあり、それにたいすお返事も頂いたが、残念ながらこの企画は氏の逝去によってかなえられなかった。メンガー文書は、メンガーの手稿、書簡などから成り立っているものだが、これによってメンガー研究の視野は一挙に広がった。とくに、日付を付した【原理】成立前夜に書かれた手稿類はまさにメンガー研究者待望の資料であった。以下、ノート一からノート十までの執筆開始時期をあげる。日付はすべて1867年のものである。以下の日付だけからしても、この時期にメンガーが集中的に経済学の勉強にとりくんだことがわかる。

ノート1…9月7日／ノート2…9月18日／ノート3…9月24日／ノート4…9月30日／ノート5…10月10日／ノート6…10月21日／ノート7…10月／ノート8…11月1日／ノート9…11月21日／ノート10…12月10日

このようなノート類は執筆の時期がはっきりしていることとあいまって、メンガー【原理】の成立史研究を遂行するにあたり、強力な武器になっている。メンガー文書のありさまは、渡米中の馬渡尚憲先生がいちはやく日本に伝え、八木先生がその文書を利用したメンガー研究をHistory of Political Economy誌に公表された<sup>4</sup>。私自身も、1991年に渡米し、メンガー文書を有するデューク大学を訪れる機会を持つことができた<sup>5</sup>。さきにあげた、ロツシャー【国民経済学の基礎】への書き込み、ミル【経済学原理】独訳本への書き込み等々は、当時の私たちの推測ではメンガーが【原理】を準備する過程で施されたものだったが、こうした推測は、メンガー文書の寄贈によってほぼ確認された。たとえば、ロツシャー【国民経済学の基礎】では、「ノート9をみよ」とか「正しい説明はノート9にある」（メンガー文庫の所蔵本へのメンガーの書き込み）等々のコメントが散見されるが、これはメンガーが上記のノートをとりながら、ロツシャーの書物にあたったことを明示している。メンガー文書を見る前は、ここでいわれているノート9なるものが何であるかは、不明だったわけであるが、こうして国立とノースカロライナの資料を突き合わせることによって、ようやくメンガーの【原理】の成立に新しい知見がもたらされることになったのである。

こうして、メンガー研究はようやく歴史研究としても実証の裏付けをともなったものになっていったが、残された問題も少なくない。まずは、すでに指摘したように、メンガーの書き込みのたぐいをトランスクリブすること、これである。ゆえあって、日本にある資料であるから、これを解読し公表するのは、私たちの責任であろう。オーストリア学派関係の一次資料の

発掘は、八木先生、塘茂樹氏、溝端剛氏など<sup>6</sup>によって精力的に進められているので、諸先生方の御協力を得ながら、いずれは私自身もこうした作業に従事してみたいと考えている。

メンガー『原理』成立史研究に即していうと、つぎのような問題もある。先に紹介したノート類は1867年に執筆されたものであるが、原理刊行の1871年に至るまでには、なお数年の月日が流れている。ここに至る月単位のメンガーの思考の流れについては、まだ不明確な点が多い。成立史研究としての精粗ということからいうと、メンガー『原理』成立史研究がたとえばマルクス『資本論』成立史研究の域に達するまでには、なおも時間がかかるだろう。これも、メンガー文庫とメンガー文書の積極的な活用によって、解決をはかる必要がある。

また、拙著では大学入学時のメンガーから話をはじめているが、これはそうせざるをえなかったからである。メンガーは彼の日記のなかでギムナジウム時代のことにも若干言及しているが、テッセン、トロップハウ、そしてクラクウでギムナジウム時代をおくったということ以上のことはほとんど何もわかっていない。ショッテンギムナジウムなどの著名なギムナジウムの場合とはともかく<sup>7</sup>、メンガーが通ったギムナジウムについて彼自身の成績も含めてどの程度の資料が残されているかは定かではない。しかし、メンガーその人について本格的な伝記を書くとなれば、資料探索の必要は大きいのである。

さらに、メンガー『原理』と先行する諸学説との関係をどのように考えたらよいか、というよりいっそう内容的な問題もある。前記の拙著では、メンガーが経済学上の革新をおこなったという経済学史研究上の通念を限界革命 Diskurse と呼んで、これを批判するという立場をとっている。むしろ、先行するドイツ語圏の経済学説とメンガーとの関係を連続したものと考えたというのが、拙著の趣旨であった。こうした考えは、ラウとメンガーとの関係を扱った卒業論文の執筆の時からなんとなく漫然ともっていたのであるが、これを明示的に主張したのが、エーリッヒ・シュトライスラーである<sup>8</sup>。拙著でも言及しているシュトライスラーの見解は私見と通ずる側面がおおいにあり、したがって、拙著では、対ミシュラー関係ではシュトライスラーの見解を批判しているものの、ドイツ経済学の伝統とメンガー経済学との関係を重視するという彼の基本的なテーゼはこれを支持するというスタンスをとっている。拙著にたいして書評を書かれた八木先生は、これではメンガーの革新性はどこにいつてしまうのか、という疑問符を投げかけられた<sup>9</sup>。なるほど、メンガー経済学の先駆者探しという観点からすれば、池田の仕事はそれなりに意味もあるだろう、しかしそれはメンガーの経済学史上の貢献を過小評価することになりはしないか、というのが批判の骨子である。これは根本的な問題である。たしかに、シュトライスラーがロツシャーのことを指導的な経済理論家<sup>10</sup>と呼ぶのは、歴史学派の論客としてのロツシャー像に修正を迫るという意義はあるものの、それで、古典派とロツシャーとの間に存する方法的懸隔が雲散霧消してしまうわけではないだろう。同様の批判は拙論にたいしても成立する。メンガー以前のドイツ語圏の経済理論が理論として無であるという通説は認めがたい、ということろまではよい。が、メンガーが、生産費説と効用理論が一体となっているかつてのドイツ経済学の伝統を効用理論に一本化したという貢献は消えないであろう。拙著には、たしかに八木先生の指摘されるような、一面性が含まれている。こうしたご批判にたいしては、将来の研究のなかで生かしていくというかたちでお答えしたいと考えている次第である。

こうした諸問題に対処していくためにも、メンガー文庫と格闘する日々はまたいずれやってくるのである。

## 注

- 1 水田洋・杉山忠平編『アダム・スミスを語る』ミネルヴァ書房, 1993年, 47ページによる。
- 2 水田洋『知の風景』筑摩書房, 1988年, 10ページによる。ただし, 同著によれば, スラッフアがかつて持っていた, そして盗まれた可能性があるスミス『国富論』初版にはスミス自身の書き込みがあるとのことである。同著, 164ページ参照。
- 3 Carl MENGER, Carl Mengers Zusätze zu Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, Bibliothek der Hitotsubashi Universität, Tokio, 1961. Carl MENGER, Carl Mengers erster Entwurf zu seinem Grundsätze geschrieben als Anmerkungen zu den Grundsätzen der Volkswirtschaftslehre, von K. H. Rau, Bibliothek der Hitotsubashi Universität, Tokio, 1963. を参照。
- 4 Kiichiro YAGI, “Garl Menger’s Grundsätze in the Making”, *History of Political Economy*, Vol.25, No.4, 1993, Winter.
- 5 その最初の成果が, Yukihiro IKEDA, “Carl Menger in the 1860s: Menger on Roscher’s Grundlagen”, in Gerrit Meijer ed. *New Perspectives on Austrian Economics*, Routledge, 1995 である。
- 6 Eugen von Böhm-Bawerk, Böhm-Bawerk’s First Interest Theory with C. Menger-Böhm-Bawerk Correspondence 1884-85, ed. by Kiichiro YAGI, Study Series 3, Center for Historical Social Science Literature, Hitotsubashi University, 1983. Eugen von Böhm-Bawerk, Innsbrucker Vorlesungen über Nationalökonomie, Wiedergabe aufgrund zweier Mitschriften, hrsg. von Shigeki TOMO, Metropolis Verlag, 1998. Carl MENGER, Transcript of Finanzwissenschaft von Prof. Carl MENGER, ed. by Takeshi MIZOBATA, Center for Historical Social Science Literature, Hitotsubashi University, 1993 がこうした成果の一環である。
- 7 ベームのギムナジウム時代については, 塘茂樹氏が言及している。Shigeki TOMO, Eugen von Böhm-Bawerk, Ein großer österreichischer Nationalökonom zwischen Theorie und Praxis, Metropolis Verlag, 1994, S. 29-30 を参照されたい。
- 8 シュトライスラーの見解については, Erich STREISSLER, “The Influence of German Economics on the Work of Carl Menger and Marshall”, in: Caldwell B. J. ed. *Carl Menger and His Legacy in Economics*, Durham and London, 1990. Derselbe, “Carl Menger, der deutsche Nationalökonom”, in Schefold, B. hrsg., *Studien zur Entwicklung der ökonomischen Theorie*, X, Berlin, 1990. Derselbe, “Wilhelm Roscher als führender Wirtschaftstheoretiker”, Kommentarband zur Faksimile-Ausgabe der 1961 erschienenen Erstausgabe von Wilhelm Roscher Ansichten der Volkswirtschaft aus dem geschichtlichen Standpunkte, Düsseldorf, 1994. を参照。
- 9 八木紀一郎「書評, 池田幸弘著『カール・メンガー『国民経済学原理』の成立史』」, 『三田学会雑誌』掲載予定。この書評については, 八木先生のご好意によって草稿段階で利用させて頂いた。ここに記して深謝する次第である。
- 10 これは, 彼の論文のタイトルにもなっている。Erich STREISSLER, “Wilhelm Roscher als führender Wirtschaftstheoretiker” をみられたい。

## 参考文献

- Eugen von Böhm-Bawerk, Böhm-Bawerk's First Interest Theory with C. Menger-Böhm-Bawerk Correspondence 1884-85, ed. by Kiichiro YAGI, Study Series 3, Center for Historical Social Science Literature, Hitotsubashi University, 1983.
- Eugen von Böhm-Bawerk, Innsbrucker Vorlesungen über Nationalökonomie, Wiedergabe aufgrund zweier Mitschriften, hrsg. von Shigeki TOMO, Metropolis Verlag, 1998.
- Yukihiko IKEDA, "Carl Menger in the 1860s: Menger on Roscher's Grundlagen", in Gerrit Meijer ed. *New Perspectives on Austrian Economics*, Routledge, 1995.
- Yukihiko IKEDA, *Die Entstehungsgeschichte der Grundsätze Carl Mengers*, St. Katharinen, 1997.
- 馬渡尚憲「カール・メンガー文書」, 『経済評論』, 1988年5月。
- Carl MENGER, Carl Mengers Zusätze zu Grundsätze der Volkswirtschaftslehre, Bibliothek der Hitotsubashi Universität, Tokio, 1961.
- Carl MENGER, Carl Mengers erster Entwurf zu seinem Grundsätze geschrieben als Anmerkungen zu den Grundsätzen der Volkswirtschaftslehre, von K. H. Rau, Bibliothek der Hitotsubashi Universität, Tokio, 1963.
- Carl MENGER, Transcript of Finanzwissenschaft von Prof. Carl MENGER, ed. by Takeshi MIZOBATA, Study Series 28, Center for Historical Social Science Literature, Hitotsubashi University, 1993.
- J. S. MILL, *Grundsätze der politischen Oekonomie*, Deutsch von A. Soetbeer, Hamburg, 1864.
- 水田洋『知の風景』筑摩書房, 1988年。
- 水田洋・杉山忠平編『アダム・スミスを語る』ミネルヴァ書房, 1993年。
- Wilhelm ROSCHER, *Grundlagen der Nationalökonomie*, 6. Auflage, Stuttgart, 1866.
- Erich STREISSLER, "The Influence of German Economics on the Work of Carl Menger and Marshall", in: Caldwell B. J. ed. *Carl Menger and His Legacy in Economics*, Durham and London, 1990.
- Erich STREISSLER, "Carl Menger, der deutsche Nationalökonom", in Schefold, B. hrsg., *Studien zur Entwicklung der ökonomischen Theorie*, X, Berlin, 1990.
- Erich STREISSLER, "Wilhelm Roscher als führender Wirtschaftstheoretiker", Kommentarband zur Faksimile-Ausgabe der 1961 erschienenen Erstausgabe von Wilhelm Roscher Ansichten der Volkswirtschaft aus dem geschichtlichen Standpunkte, Düsseldorf, 1994.
- Shigeki TOMO, Eugen von Böhm-Bawerk, Ein großer österreichischer Nationalökonom zwischen Theorie und Praxis, Metropolis Verlag, 1994.
- Kiichiro YAGI, "Carl Menger's Grundsätze in the Making", *History of Political Economy*, Vol.25, No.4, 1993, Winter.
- 八木紀一郎「書評、池田幸弘著『カール・メンガー『国民経済学原理』の成立史』」, 『三田学会雑誌』掲載予定。

(慶應義塾大学経済学部助教授)